

## 趣旨説明

比較思想学会の設立者である中村元博士は、思想の比較類型学的な方法を推進し、一方で東西の思惟方法の相違を、通時的に明らかにするとともに、他方で、世界の諸民族がもつ思想形態に共通する発展を、共時的に捉える世界思想史の構想を展開し、きわめてスケールの大きな比較思想の体系を完成させたことは夙に知られている。とくに比較思想の主な著書に『東洋人の思惟方法』があるが、二十一世紀に入って、世界のグローバル化が進み、新たに比較思想の研究が重要性を増す状況が生じてきた。民族紛争や国際的なテロの拡大が進む中で、従来のような欧米の哲学思想の優位は完全に崩壊し、西洋中心主義が無効となった現在、西洋を基準にして東洋を見るのではなく、あらためて東洋的思惟の深層にせまって、その独自性を探ってゆくことが大きな課題となってきた。そこで、今回の大会では、非西洋的思惟がもつ独自性についての基調講演のあと、「再考・日

## 井上克人

本人の思惟方法」というタイトルのもとに、三名の先生方に、独自の視点から語っていただくことになった。

基調講演「形而上学としての比較哲学

—アンリ・コルバンと井筒俊彦を手引きとして—

永井晋（東洋大学）

シンポジウム「再考・日本人の思惟方法」

(1) 共同体と贈与をめぐる日本的思惟の深層

—宮沢賢治の場合— 岩野卓司（明治大学）

(2) 〈あいだ〉を開く思考

—近代日本哲学への視座— 木岡伸夫（関西大学）

(3) 「おのずから」と「みずから」の「あわい」

竹内整一（鎌倉女子大学）

まず、基調講演をされた永井晋氏は、「比較哲学」とは何かという根本的な問いに対して一つの考察を行う。氏は比較哲学を形而上学として見直し、その方法として現象学を使用することによって、「比較哲学」の新たな可能性を見出そうと試みる。

西洋の学問における「比較」は、西洋の優位を確認することが主たる動機になっており、そこには根本的に西洋中心的なオリエンタリズムの視線が潜んでいる。その弊から抜け出るため、氏はコルバンの現象学的方法に着目する。なぜなら、コルバンは、いわゆる「現象」の定義を、イスラーム神秘主義もしくは秘教における現象概念から理解しようとするからである。イスラーム神秘主義の伝統では、「現れ」と「隠れ」の現象に着眼し、顕現の元に隠れたものを開示しようとするが、その開示は解釈学によって行われると氏は語る。

コルバンがユダヤ神秘主義を意識しつつも、イスラーム神秘主義を手引きとして行う現象学的分析は、神をその絶対内において経験することであり、そこに元型的比較哲学の可能性が見られると氏は見る。このように神・一者を超越としてではなく、その絶対の内在において、徹底して内から経験すること、そしてその内在を想像的・創造的なイメージとして描き出すところこそが、イスラーム神秘主義の課題である。つまりコルバンによれば、神・一者は、その媒体次元として「想像された多様なイマージュの世界」を通して自己顕現（神顕現）すると考えられるのである。

このようにして現象として救い出された中間界、イマジナルの純粹映像の世界は、新たな知の理論を形成するが、そこにおいてこそ、「形而上学としての現象学的比較哲学」が可能になると、永井氏は強調する。それはまさしく、創造的想像力への還元によって経験的多様性から解放され、一者の象徴・元型へと変容した諸伝統を、超歴史的な光の交錯として比較することにほかならない。

次にシンポジウムでは、とくに日本人の思惟方法にテーマを特化させて語っていただいた。まず岩野卓司氏だが、氏は西欧の共同体がモノセファル（単頭）志向を持っていることの指摘から話を始められた。つまり「神」、「王」、「父」のような「頭」や「中心」による支配がそこにはあると言うのである。ところが宮沢賢治の思想にはそれは異なる可能性があると氏は示唆する。賢治が考えるイーハトヴの共同体では「頭」や「中心」は不在であって、人間も中心ではなく、動物、植物、鉱物、異界の者が脱中心的な形でそこに存在している。そこでは「頭」や「中心」になろうとする者はその傲慢さから身を亡ぼすことになるのである。賢治は徹底的にポリセファル（多頭）あるいはアセファル（無頭）とみなしえよう。彼のこうした脱中心的な思想の背景には、アニミズムにも通じる「草木国土悉皆成仏」の発想があると言ってよいかもしれない。

ところで、この共同体では「贈与」が重要な役割を果たしている、と岩野氏は言う。商取引による経済、貨幣との交換、貨

幣による価値の決定、さらには他人を犠牲にする競争の社会に対して賢治は批判的であって、資本主義が強いこういった経済と社会のありかたに代わるものとして、彼は〈贈与〉に注目している。氏は指摘する。「洞熊学校を卒業した三人」では、蜂が花から蜜をもらいその代わりに花粉を届けるといふ贈与交換が語られ、「狼森と笹森、盗森」では自然との贈与交換が主題になっており、さらには、「セロ弾きのゴーシュ」では、動物に曲の演奏を贈与することによって上達するという、利他的な贈与のもたらす恵みについて書かれている。しかし、贈与は対象を贈与するだけでは収まらず、それは自己の贈与にまでエスカレートし、贈与者の自己犠牲をもたらすことにもなること、そこに氏は着目する。グスコブドリはイーハトヴを冷害から救うために自ら犠牲になった。鳥の大尉は平和な世界のために体が何べん引き裂かれてもよいと祈ったし、ジョバンニはみんなの幸のために自分の体が百回灼かれてもかまわないと述べている。自然や他者との贈与による関係はある種の恵みをもたらしはするが、その反面自分の命をも贈与する危険をも孕んでいるのだ。贈与と供犠のこの結びつきは、「八紘一字」のような日本の起源に先立つ古層を示唆しているのではないのか、そう岩野氏は強調する。

次に、木岡伸夫氏は一九三〇年代における「風土学」（和辻哲郎）および「形の論理」（西田幾多郎、三木清）を経て、戦後の「アナロギアの論理」（山内得立）に結実する過程を通観

することによって、日本（東洋）の哲学が現代世界に寄与する点は何かを明らかにしようとする。和辻哲郎は西洋文明に対する自己の立ち位置を見定めるきっかけとして「風土」を発見し、そこから独自の風土学をうちたてたことによって唯一の絶対者を実体化する西洋形而上学の呪縛から脱する道が開かれた。さらに、西田幾多郎の「弁証法的論理」は、「弁証法」の装いの下に主体的な無の思想を具体化し、田辺元の「種の論理」は、西田を批判しつつ、人と人の〈あいだ〉（間柄）を開く社会哲学の構想を提示し、三木清の「構想力の論理」は、新しい「形の論理」を追究したものの、完成を見るには至らなかった、と木岡氏は言う。

ところが、氏によると、日本の哲学は、戦後、山内得立（一八九〇〜一九八二）によって、「アナロギアの論理」という形で定式化され、その本領は、大乘仏教に由来するレンマ的な「即の論理」を、プラトン以来の西洋的な「ロゴスの論理」と統合することにあつた。山内は、西田以後の誰も明確に自覚することがなかった「東西論理思想の総合」を課題として引き受け、その実現に尽力したのである。

山内は、西洋中世の「存在のアナロギア」における「存在の根拠」を、神から「絶対無」に置き換えたが、その真意は、「存在のアナロギア」を換骨奪胎した〈無のアナロギア〉をうちだすことにあつた。しかしそれは、形而上学のロゴスの論理構造にはなじまないものである。こうしたロゴス（西）とレンマ

(東)のあいだに聳える壁をどう越えるのか。木岡氏は構想中の「邂逅の論理」を、そのための企てとして紹介する。(邂逅)は、絶対者との垂直的な(あいだ)と、人々の水平的な(あいだ)を同時に開く出来事であり、われわれに親しい「縁」が、それを表していると、木岡氏は主張される。

最後に竹内整一氏の「おのずから」と「みずから」の「あわい」についての論考だが、日本語では、「おのずから」も「みずから」も「自(ずか)ら」だが、その背後には、「みずから」為したことが「おのずから」成ったことが別事ではないという理解がある。「自発」という言葉は、「みずから進んで行う」という意味であると同時に、「(れる・られる)」を「自発の助動詞」と言うように、「おのずから発する」という意味でもある。しかし、こうした言葉遣いにおいて、「おのずから」と「みずから」は、必ずしも未分ないし同一だというわけではなく、両者は重なりつつ異なり、異なりつつ重なっている、そう竹内氏は指摘される。

「おのずから」という言葉は、古語では、自然の成り行きそのまま、という用法と同時に、万一・偶然に、という意味でも使われていた。「おのづからのことあらば」とは、もし万一死んだならば、という意味だが、そこには、自分の側からすれば万一・偶然と思われる事態も、自然・宇宙の側から見れば当然・必然の成り行きなのだという説得が込められており、同時に、「おのずから」の出来事は「みずから」の営みには「いかにと

もしがたい」、他の働きとしてあるのだという説得も込められていることを竹内氏は指摘する。「おのずから」とは、「みずから」にとつて、もともとその内にある働きでありながら、同時にどうにもならない、外、他なる働きとしてあるということでもあるのだ。

竹内氏は、こうした、「おのずから」と「みずから」の関わりを(あわい)という言葉で考えておられ、「あはひ」とは、「アヒ(合)アヒ(合)」の約。相向う物と物との間の空間。転じて、二つのものの関係」が原義だということである。さらにそうした検討を、「みずから」と他の「みずから」との(あわい)のあり方(倫理)と繋げて、日本人の思惟方法を考えようとされた。

基調講演およびシンポジウムのあと、フロアからは多くの様々な質問が提出され、また貴重な指摘もあり、提題者の先生方からは詳しい補足説明があつて、大会は大変充実したものになった。

(いのうえ・かつひと、宗教哲学・東西比較思想・日本思想、  
関西大学教授)